

推薦レポート

山口俊雄先生推薦

太宰治「彼は昔の彼ならず」論 マダム像からの考察

菊 地 真 衣

一

太宰治「彼は昔の彼ならず」(『世紀』一九三四・九)は従来、正体不明の人物である《青扇》を中心に論じられることが多かった。しかし本論では《僕》の言葉の信憑性とマダムの人物像に注目し、この物語におけるマダムの重要性を明らかにしていく。

二

まず先行論を踏まえ、《僕》の言葉の信憑性について検証していく。永井博の論では《僕》の言葉と行動の矛盾に注目し、「この『僕』という男は、自分のことを実際よりもよく見せようとしたがる男だ」¹と述べている。そして《僕》自身ではなく、青扇やマダムについて語る際は自分の思い込みを語っていると指摘し、おおよそ《僕》の語りは信用ならないと結論づけている。

また《僕》の語りの信憑性が低い理由にマダムの影響を受けていることが挙げられる。例えば《僕》は回想内で青扇に対する評価が変化していくことが挙げられる。青扇に銭湯屋で再会し家に誘われ訪ねてみると

本人はいなかったというシーンで、本来であれば青扇に怒りが向く場面であっても、この時点ではマダムの「青扇は信用ならない」という言葉を

のろけ話と思い込んで取り合おうとしない。しかし物語の終盤である青扇とマダムが再び同棲を始めるシーンでは、《僕》はマダムと進んで会話を続けようと質問し続け興味を持つてることが窺える。そして

「ええ。私、そんな男のかたが好きな。もすこしまへにそれを知つてくださいましたなら。でも、もうおそいの。私を信じなかつた罰よ。」²(一三四頁)

という言葉で会話が終わっていることから、この言葉で《僕》の考えが完璧に変わったということがわかる。この点については長原しのぶの論でも「『マダム』だけが『僕』に影響を与える人物としてあるといえる」³という同様の指摘がなされている。なぜマダムが《僕》に影響を与えるのかについては後述する。

三

次にマダムの人物像について明らかにしていく。これまでマダムはその他の太宰文学の女性の描かれ方と同様に母性をもって青扇に接する女

性と捉えられている。また長原しのぶの論では、男性とは異なる女性の強さによって男性が強さを保つことができていると述べている。本当にそうだろうか。マダムが他の妻と違い自立していることは長原しのぶの論で挙げられていた以下のシーンからわかる。

「友だちも無いやうですね。」

「ええ。みんな悪いことをしてゐますから、もうつきあへないのださうです。」

「どんな悪いことを。」僕は金銭のことを考へてゐた。

「それがつまらないことなのです。ちつともなんともないことなのです。それでも悪いことですつて。あのひとものの善し悪しがわからないのでございますのよ。」(二四二頁)

と青扇の問題を「つまらないこと」と言える強さがあることがわかる。言動のみに注目すればマダムは母性を持つ強かな女性と言える。しかし重要な行動が見落とされていると考えている。それはマダムが家出と再同棲をしていることである。このマダムの家出について作中で《僕》はマダムが愛想をつかして出ていったと語っている。しかし前述した様に《僕》の言葉の信憑性を考えると言葉通りに受け止めるべきではないのではないだろうか。事実としてわかることは、マダムが家を転々としていくことだけであり、実家に帰ったかどうかとも疑わしい。そこでこの行動は青扇が妻を変えていくことと同様またはそれ以上の行動ではないかと考えた。

青扇は妻をとっかえひっかえするものの、「家」と言う特定の場所を持つのに対し、マダムが家を転々とするのは彼女が身一つで生きていく強さを持っていると言える。彼女が青扇より強い点として、青扇の知らない行動をとっていることも挙げられる。マダムが《僕》に敷金と

して五円切手を渡す行動をするが、後の青扇の「ぎよっとして立ち上がる」反応から彼のあずかり知らぬ行動であることがわかる。

そして何より「文学少女」や「下町のひと」と違い、マダムは言葉を発している。つまり個性を持った登場人物である。これらの点からマダムはただ自立している女性に留まらず、作中で一番強さを持った人物であると言える。従来の母性を持った自立した女性という解釈では、マダムの人物像を捉えきれないのではないだろうか。

四

これらのことを踏まえ、《僕》とマダムの関係について検討していく。「二」で示した、マダムが《僕》に影響を与える理由にもなっており、「彼は昔の彼ならず」の最も注目すべき点である。物語の冒頭、ものほし場と《僕》は《君》にこう語りかける。

はじめから僕は、あの女を君に見せたかつたのである。

(略)

あの屋根のしたに、いまの女と、それから彼女の亭主とが寝起きしてゐる。(二〇四頁)

《僕》の関心はあの女＝マダムであることは前提として示されていることと、マダムのことを「青扇の妻」と紹介しているのではなく、青扇のことを「マダムの亭主」と紹介していることがわかる。ものほし場では話題の中心はマダムに設定されている。それにもかかわらずその後には続く回想シーンは、青扇が中心となっている。この差は何によるものだろうか。それはこの作品が一人称かつ対話形式であることによって生まれている。

まず一人称で語られるということは、地の文まで語り手の影響がある

ことになり、「二」で取り上げたように信憑性が低い文章になる。加えてこの作品では特殊な対話形式が用いられている。対話相手は《君》という形で読者が置かれている。これにより読者は没入感を得ることができ、それが代わりに本来の対話形式を持つ「答え」を失ってしまう。よって物語全体において《僕》の言葉のみが書かれることになる。信憑性はおろか常に客観性が失われているのだ。したがって読者は《僕》の言葉から読み取れる「感情」に目を向けざるを得なくなる。この「感情」によって《僕》に影響を与え「話題の中心の差」が生まれることになる。

では具体的にどんな感情を持っているのだろうか。結論から言えば、《僕》はマダムに恋心を抱いている。一番わかりやすい場面は回想シーンの終盤、以下の部分である。

「ええ。私、そんな男のかたが好きなの。もすこしまへにそれを知つてくださいましたなら。でも、もうおそいの。私を信じなかつた罰よ。」軽く笑ひながら言つてのけた。

僕はあしもの土くれをひとつ蹴つて、ふと眼をあげると、藪のしに男がひつそりを立ってゐた。どてらを着て、頭髮もむかしのやうに長くのびてゐた。僕たちは同時にその姿を認めた。握り合つてゐた手をこつそりほいで、そつと離れた。(二四三頁)

青扇に声をかけられる前に二人が手を握り合つていたことがわかる。このマダムの台詞は一で取り上げたように《僕》がマダムによつて考えを完璧に変えられる、つまりマダムの虜になつたシーンでありながら同時にフラれた瞬間でもある。これを青扇が中心の回想シーンのオチに持つてきていることから、無意識にマダムが話の中心になつてしまつていくことがわかる。他のシーンからも関係性が窺える。

「マダムが逃げました。」玄関の障子によりそつてしづかにしやがみ

こんだ。電燈のあかりを背面から受けてゐるので青扇の顔はただま
つくるに見えるのである。

「どうしてです。」僕はどきつとしたのだ。

「きはれましたよ。ほかに男ができたのでせう。そんな女なので
す。」いつもに似ず言葉の調子のはきはきしてゐた。

(略)

僕は二本目の煙草をくはへ、またマツチをすつた。さつきから氣にかかつてゐた青扇の顔をそのマツチのあかりでちらと覗いてみるこ
とができた。僕は思はずぼろつと、燃えるマツチをとり落とすたの
である。悪鬼の顔を見たからであつた。(二三三頁―二四四頁)

マダムが家出をしたことを知るシーンである。青扇の顔が真っ黒であつたり、悪鬼に例えられている。高塚雅の論⁴では青扇が二人の不倫を確信しているから《僕》がそのような表情だと解釈してしまうと指摘しているが、この小説の形式上《僕》の主観的な思い込みと捉える方が自然である。よつて僕の罪悪感が表れている表情であると解釈した。

以上のことからマダムには恋心を、青扇には罪悪感を抱いて話していることがわかる。《僕》は「二」で指摘した様に自分自身を良く見せたい
がる性格であることを踏まえると、女性にフラれたという外聞の悪い話を
隠すため、同性の青扇に騙された話にして《君》に話すことにしたの
だろう。しかし隠しきれないマダムへの執着と青扇への同情が見え隠れ
する点がこの作品の重要点であり、魅力になっている。

五

《僕》と青扇、マダムの関係をまとめていく。マダムが作中で一番強
さを持った人物であるから、彼女は二人のどちらかを選ぶ立場にある。

その選ばれる側の二人は鶴谷憲三が主張する「等価であり、いつでも交換可能な存在」⁽⁵⁾であったと推測される。それは再びものほし場に戻ったシーンからわかる。

——よし。それなら君に聞かうよ。空を見上げたり肩をゆすつたりうなだれたり木の葉をちぎりとつたりしながらのろのろさまよひ歩いてゐるあの男と、それから、ここにゐる僕と、ちがつたところか、一点でも、あるか。(二四五頁)

《僕》自身もある程度そのことを認識していることがわかる。しかし肝心の二人の違いが明かされることはない。なぜなら「彼は昔の彼ならず」はその理由がわからない《僕》の言葉しか書かれなからだ。《僕》は理由がわからないからこそフラれた理由を思い込みで悪者にした青扇に向け、私たち読者に質問を投げかけることになる。この物語はそんな滑稽な《僕》の姿を楽しむコメディなのではないだろうか。

(1) 永井博「太宰治『彼は昔の彼ならず』論覚え書―「僕」のことばの信憑性をめぐって」『金沢大学国語国文』二九、二〇〇四・三、三八頁

(2) 以下、「彼は昔の彼ならず」の本文は『太宰治全集 02』（筑摩書房、一九九八）に拠る。漢字は通行の字体に改める。

(3) 長原しのぶ「太宰治『彼は昔の彼ならず』論―「マダム」像からの考察」『日本文藝研究』五二（四）、二〇〇一・三、一〇四頁

(4) 高塚雅「彼は昔の彼ならず」論―〈潜在的二人称〉に関する考察」『太宰治〈語りの場〉という装置』双文社出版、二〇一一

(5) 鶴谷憲三「新視点からの作品論」『彼は昔の彼ならず』『解釈と鑑賞』五〇（一二）、一九八五・一一、九二頁